

# 災害経験で アジアとつながる

<Profile>

ただ・かずひこ

1958年岩手県遠野市出身。青山学院大学卒業。東日本大震災後、遠野市民を中心としたボランティア団体、NPO法人遠野まごころネットを設立。甚大な被害を受けた岩手県沿岸部に近い立地を生かし、現地の混乱を避けるために遠野市で個人ボランティアの受け入れを行う。

NPO法人

遠野まごころネット理事長

多田 一彦

ワゴン車に積めるだけの水、コメ、灯油、毛布を載せて、友人3人と岩手県遠野市を出たのは2011年3月13日。泥だらけの道の瓦礫をどけながら、真っ暗なトンネルを抜けて大槌町に入った。至る所から煙が立ち上り、灰色の雪が舞っている。泥と瓦礫のすき間から見えるアスファルトを目印に走る。

道端には時折、遺体があった。この時からしばらくの間、私の記憶には色がない。山火事の残煙の中、山道を通って、大槌町の災害対策本部にたどり着くと、不眠不休で指揮を執る町役場の平野公三総務課長がいた。彼の家族の安否は不明だった(数日後に連絡が取れた)。「何かできることはないか」と尋ねると、「町長も多くの職員も死んでいるだろう。何でもいいからやってくれ」と彼は答えた。

室内を見回すと、きちんとした避難所マップがなかった。私たちは3日かけてそれを作り、各避難所を回ってニーズを聞き、一つずつ対応していくことにした。とにかく必要な物資を集めては配った。

2週間ほどたち、ふと気が付いた。県外ナンバーの車、野宿する人、倒壊家屋に入る人の姿が目についたのだ。「危ない」。とっさにそう思った。遺体の収容が終わっていないし、道の瓦礫も取り除かれていない。渋滞が起これば、物資も運べない。そこで私たちはボランティアをまず遠野に集め、バスで被災地に運び、作業が終わったら遠野に連れて帰ることにした。こんな状況下で、私たちだけで対応できるわけもない。みんなの力を借りる以外に方法はなかった。

私たちは「遠野に集まれ！」と世界中に呼び掛

けた。言葉の問題はどうするかなどの不安もあった。しかし「外国から来る人の方をもっと不安に決まっている。それでも何かしたいと言ってくれるんだ。自分たちが不安に思っている」と主張した。結果、世界中からたくさんの方が集まってくれた。それは今も途絶えない。ソウルや四川、ジャカルタやアチェ、マニラやバンコクにまでネットワークが広がった。

私はその縁で、2011年9月、ジャカルタとアチェの大学に呼ばれて講義をした。「日本には年間3万人もの孤独死と自殺者がいる」と話すと、現地の人たちは「そもそも孤独死とは何だ」「信



福島第一原子力発電所の事故の影響で、地元では育てられなくなったカボチャ「いいいたて雪っ娘」を、遠野まごころネットの支援で遠野市内で代理栽培している



台風「ハイエン」の被害を受けたレイテ島。そこにある人々の笑顔は変わらない

じられない」という。親せきが老人や子どもの面倒を見るから、保育所もそんなに必要ないという。アチェの小さな村では、少年たちが郷土芸能の大鼓で大歓迎してくれた。夜9時を回っているにもかかわらず、住民が続々と集会所に集まってくる。小さい子どもは、「自分も大きくなったら、お兄ちゃんみたいになる」と、太鼓を力強くたたく村のヒーローをキラキラと輝く瞳で見ている。

震災から1カ月ほどたったころ、大槌町でも白澤伝承館(私設避難所となっていた)の人たちが「いつまでも泣いてばかりはいられない。今日から前を向く努力をする。でもまだ無理な人は待っているから大丈夫だ」と、郷土芸能である白澤鹿踊りを披露した。見る人舞う人、全ての人が泣いていた。郷土芸能はどの国でも、コミュニティの形成には重要なのだと感じる。

昨年11月、大型台風「ハイエン」で大きな被害を受けたフィリピンのレイテ島を訪れた。現地の人々はたくましく明るかった。自力で小屋をどうん建てるで住んでいたし、どこへ行っても子ども

私が子どものころは、所構わず野球やサッカーをやるものだから、近所のガラスをよく割った。そして、大人たちはよくこう言っていた。「お前が大人になるころには、日本はすごくなくなっているぞ」と。しかし今はどうだ。少子高齢化で人口は減る一方。町がなくなるかもしれない。

しかし、悲観することはばかりではない。被災地の小中学生が私たちの事務所に「いつもありがとう」とお礼を言いに来してくれる。私は、彼らを見ていると、アチェの子どもたちを思い出す。「この子たちが大きくなるころには、もっと良い日本になるぞ」。そう確信するのだ。

世界には、政治では解決できないことが山ほどある。だからこそ私たち民間人が、協働し、補い合うことが重要なのだ。NPO法人遠野まごころネットは今、ASEAN(東南アジア諸国連合)の人たちと連携して、コミュニティの強化と防災に協働で取り組むプロジェクトをスタートさせた。小さい力でもできることを一つずつ、実行していきたいと思う。

たちの声がする。仮設住宅は粗末なもので、板一枚のドアと窓があるだけ。6畳一間に3人が暮らし、向こう三軒両隣の音が筒抜けなのだ。日本なら「うるさい」とクレームが起こり、とても耐えられないだろう。「子どもはうるさいもの。元氣な証拠でいいじゃないか。地域の宝だ」。この言葉に私は震えた。